

新体操競技における新採点規則に関する比較考察

河野 未来 川口 鉄二

キーワード：新体操 採点規則 難度

Comparison Study on new scoring rules in the Rhythmic Gymnastics competition

Miku Kawano Tetsuji Kawaguchi

Abstract

The rules of rhythmic gymnastics is revised once every four years, distribution of the technical value and the artistic value and the difficulty level of body is also reviewed by Federation International Gymnastics. In this study, I made a comparison between the bad-mark items in the rule of rhythmic gymnastics scoring from fiscal 2009 to fiscal 2012 and from fiscal 2013 to fiscal 2016 focusing the difficulty level of body.

In addition, I clarified the difference adding and deducting a point in a new marking rule by an observation analysis of buckle pivot. In the comparison of the marking rule, it became clear that there are no big changes in the basic features and the bad-mark items. But, in an observation analysis of buckle pivot, although there are no big changes in marks in the difficulty level of body and in the referee's decision, it became clear that a disadvantages of the technique and a disadvantages of the art are important. As a result, the same may be said of other difficulty level of body. Consequently, in a new marking rule, it is important to get the score of skill practice in the final judgment.

I. 緒言

女子新体操競技 (Rhythmic Gymnastics) の採点規則は、4 年を 1 サイクルとして、オリンピックを終えるごとにルール改正が行われ、技術的価値・芸術的価値の得点配分や難易度のレベルなどについて国際体操連盟 (Federation International Gymnastics 略称-F.I.G) によって見直される。

今年度より施行となった 2013～2016 年度版採点規則に関する詳細な研究はまだ見当たらない。このルール変更に対して、早急に変更内容及びその指針や方向性を把握し、トレーニングに反映することは競技において極めて重要である。

II. 今日の新体操競技

芸術体操とも呼ばれる新体操競技では、本来、動きの可能性を追求し、動きの奥深さ、体と手具との一体感、技の高度さが織りなす美的表現を競技特性とするスポーツである。そこで用いられる身体表現や女性らしい動き、美しさの優劣は、物理学的、生理学的、心理学的な合法則性などの単純で計量的な正否判断に委ねられているわけではなく、生き生きとした実存的身体運動が人間の観察能力を動員して演技や技の評価が行われるものである⁽¹⁾。

例えば、新体操競技のピボットを例に挙げると、この技の場合、回転数の多さが得点に反映されることになるのだが、回転軸のぶれや、姿勢欠点を持つ実施では、高い評価は得ることはできない。評定競技では、運動経過における美しさと難しさに本質的価値を見だし、その優劣が競い合われるのだが、その技にどのような美的価値基準が適用されるかは、時代において変動し、固定的に捉えることはできない。従って、美しさや難しさに対する価値意識の変化と並行して採点規則も時代性を取り入れながら改正されていくことになる。そのため変更に伴う

評価基準が確認されていないと、時代の流れに沿った演技を構成することはできなくなってしまう。そして、新たな価値基準は審判によって適用されるため、その評価を行う審判の視点を厳密に確認しておくことは、競技得点に反映される演技プログラムを構成する上で極めて重要なことと考えられる。

III. 研究の目的

本研究では、2009 年～2012 年度版女子新体操採点規則 (旧採点規則) と 2013 年～2016 年度版女子新体操採点規則 (新採点規則) の身体の難度 (ジャンプ・バランス・ローテーション) に焦点をあて、実施減点項目の比較を行うことで、新採点規則においてこの技がどのような視点から評価され、得点に影響を及ぼしているのかを明らかにし、それによって新採点規則の動向を把握し、競技の方向性を見出そうとするものである。

IV. 研究方法

(1) 採点規則の比較

本研究では、バックルピボットを採点事例とし、新旧採点規則における関連条項に関して、比較考察を行った。考察に際しては、同じ内容を示すにも関わらず、名称や表記内容が異なるものものに対しては、最新の表記で統一した。

(2) バックルピボットの評価

1. S 大学新体操競技部個人競技選手-A 選手によるバックルピボットの実施をビデオ収録し、観察分析の対象とした。

2. S 大学第 4 体育館において、壁に沿って競技用のフローアを敷き、被験者の動きに対し側方からビデオカメラ 1 台を 1 m の高さに設置した。

A 選手のボールの演技構成にあるバック

ルピボット前後3秒の演技を実施してもらい、撮影を行った。撮影された映像から画像編集ソフト(PhotoImpact)を用いてキネグラムを作成し、呈示資料の一部とした。

3. 撮影したビデオ映像及び連続写真に対して(公財)日本体操協会公認新体操第1種審判免許取得者10名により、採点・評価を行った。

V. 考察

(1) 採点規則の比較考察

・身体の難度ージャンプ (表2)

2009～2012年度版採点規則	2013～2016年度版採点規則
3.1.1 基礎的特徴 ・空中にて形が明確で固定していること ・ジャンプの十分な高さ (「十分な高さ」とは明確で固定された形を得るための十分な跳躍である)	1.9.1.1 基礎的特徴 ・空中にて形が固定して明確であること ・十分な高さにおいてその形を見せること

ジャンプの基礎的特徴に対しては、特に変更された点は見られないが、採点規則上にあるシンボルのジャンプ難度の種類は117種類から57種類へ大幅に減少している。これは、旧採点規則では、演技構成に入れることのできる難度すべてのシンボルと図を記載しており、新採点規則では「1.9.1.2 ベースに回転、リング、後屈を伴わないジャンプの場合、180°を超える回転またはリング+0.1または胴の後屈では+0.2となる。」とあり、採点規則に図示されている57種類のジャンプ難度に、演技者が実施できる要素を選び、難度の価値点を上げることができるようになったからであるといえる。

また、ジャンプの形の定義としては、旧採点規則と新採点規則で特に変更された点はないが、開脚のジャンプでは「180°以上の形を明確にする」、バックル・リングのジャンプでは「頭と足はできるだけ近くにする」等の細かい角度と形の定義がある。

減点項目としては、旧採点規則では「形に大きさが無い-0.1点」「着地が重い-0.2点」となっているが、新採点規則では「形に大きさが無い：着地が重い-0.1点」が、そのつど失敗した要素ごとに減点される。

・身体の難度ーバランス (表3)

2009～2012年度版採点規則	2013～2016年度版採点規則
4.1.1 基礎的特徴 ・爪先立ちあるいは片膝立ちで実施され、形が明確で固定されていること (難度中に動脚あるいは軸脚が動いてはならない)	1.9.2.1 基礎的特徴 ・形が固定され明確であること(静止位置) ・爪先立ちで、踵をつけて、または身体の異なる部位にて実施

バランスの基礎的特徴は、新採点規則では支持位置に「身体の異なる部位にて」という言葉が追加されている。これは新採点規則への改正の際に、身体の難度から「柔軟と波動」という要素がなくなったため、甲立ちや胴支持での柔軟、肘支持での柔軟(図14)がバランスのカテゴリーに変更されたことが原因である。



(図14) 左から甲立ち、胸支持での柔軟、肘支持での柔軟

シンボルのバランス難度の種類は、106種類から48種類と減少しており、これはジャンプ難度同様に「1.9.1.2 演技中で一度のみ「爪先立ち」または踵をつけたバランスでのスローターンを実施することが可能である。この場合の価値は、ベースの価値のバランスに180°またはそれ以上のスローターンを難度中に行うことで0.1加点することができる」という規則が採用され、これによって演技者が実施できる要素を選び、難度の価値点を上げることができるようになったからであるといえる。

減点項目としては、旧採点規則では「形に

大きさがない-0.1点」「形が不明確で保持されていない-0.2点」となっており、新採点規則では「形に大きさがない：形が不明確で保持されていない-0.1点」が、そのつど実施が不正確であった要素ごとに減点される。

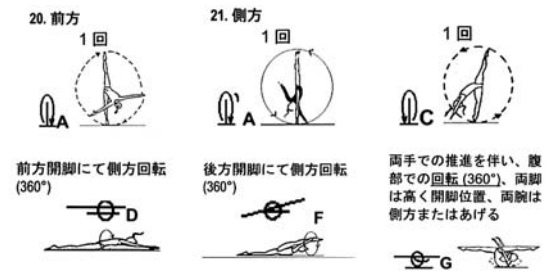
身体の難度-ローテーション (ピボット) (表4)

2009～2012年度版採点規則	2013～2016年度版採点規則
5.1.1 基礎的特徴 ・かかとを高く上げ、爪先立ちで実施されること ・回転が終了するまでの間、形が明確で固定されていること	1.9.3.1 基礎的特徴 ・最低 360° の基本回転 ・回転中に形が固定され明確であること ・爪先立ち (ピボット) で、踵をつけて、または身体の異なる部位での支持

ローテーションの基礎的特徴は、新採点規則では支持部位に「身体の異なる部位にて」という言葉が追加されている。これはバランス同様、新採点規則への改正の際に、身体の難度から「柔軟と波動」という要素がなくなったため、イリュージョンや前後開脚での回転、腹部での回転が (図 16) がローテーションのカテゴリーに変更されたことが、原因である。注意として「回転が終わるまで形を維持することが基本で、特に動脚が回転中、変わらずに維持できているかどうか重要」「踵が低い場合は、難度はカウントするが実施で減点」という指針ある。

シンボルのローテーション難度の種類は、76種類から45種類に減少している。これはジャンプ難度同様に「1.9.3.2 爪先立ちによる 360° の各追加の回転は……その難度のレベルをベースの価値ずつ上げる」「踵をついた状態、または身体の他の部位での 360° の各追加の回転は、その難度のレベルを 0.2 ずつ上げる」「選手の高さの各変化について (軸脚を曲げていく、軸脚を曲げた状態から伸ばした位置に戻す) +0.1 点」という規則が採用され、これによって演技者が実施できる要素を選び、難度の価値点を上

げることができるようになったからであるといえる。



(図16) 上段：イリュージョン (前方・側方・後方)
下段左・中央：前後開脚での回転 (前方・後方)
下段右：腹部での回転

減点項目としては、旧採点規則では「形に大きさがない・回転中の移動 (滑る) -0.1点」「形が不明確で固定されていない・回転中に踵をつく・回転中に弾む-0.2点」「身体の軸が垂直でなく終了時に一歩動く-0.3点」となっており、新採点規則では「形に大きさがない：形が不明確で固定されていない・ルルベでの回転の実施中に、回転の一部で踵をつく・回転中の移動 (スライド) -0.1点」「身体の軸が垂直でなく終了時に一歩動く・回転中にホップ、または中断する-0.2点」が、そのつど失敗した要素ごとに減点される。

(2) バックルピボットの評価

本研究では A 選手のバックルピボットを撮影した映像と連続写真にしたもの (図 17) を、10 名の (公財) 日本体操協会公認新体操第 1 種免許取得者に観察してもらった。

その結果、8 名は 1 回転 (難度価値 0.3 点)、2 名は 2 回転 (難度価値 0.6 点) であった。回転数の相違は、回転終了時に動脚と手が離れる瞬間が、開始時と同じ位置で終了している状態なので 2 回転、と採点した審判と、同じ方向で終了したのでは 2 回転を明瞭に回転しているとは言えない、と採点した審判に分かれた。ここでの身体の難度の実施に対する採点の視点は、旧採点規則

と新採点規則では、大きく変化はないことがわかった。

次に、実施による技術的欠点で、10名全員より減点対象となったのは「“ルルベ”での回転の実施中に、回転の一部で踵をつく」という項目だった。A選手の回転中の写真では、ルルベの位置が低く、踵がついている状態が見られる。さらに、踵が内転している状態が動脚を持つ際、回転開始時、回転終了時に見られ、基礎技術の項目で減点されていることがわかった。旧採点規則においても、ピボットの基礎的特徴に「かかとを高く上げ、爪先立ちで実施されること」と提言されているが、ピボットの回転数をより重要視した、という意見が多かった。この視点の違いは、新採点規則に、芸術の減点項目として新たに設けられた「構成の統一性」というカテゴリーが影響を及ぼしていると考えられる。この「構成の統一性」では、演技全体のリエゾンの質を非常に重要視しており、「構成は、一貫性のない身体の難度の羅列になってはならず、ひとつの動きから次の動きへ移行する際は、論理的かつ滑らかなに行わなければならない。」とある。これにより、バックルピボット前後の演技構成も「構成の統一性」を高めるために、非常に大切である、という意見もあった。

A選手の構成では、ボールをキャッチし、プレパレーションに入る前に一度胸でのボールの支持があり、姿勢を保ち直している動作が伺える。これは演技構成上の論理性に欠け、滑らかな準備動作ではないということがわかる。また、A選手のバックルピボットを行う際のボールの操作では、回転中の指の開き、プレパレーション及び回転終了からのリエゾンの前腕での保持が、基礎技術での減点対象となる。演技中の手具における「不正確な操作」は、旧採点規則と新採点規則の両者において、演技中にそのつど最高1.0点までの減点がある。これより、

実施で最高10.00点ある得点配分の中で、手具の基本的な操作が非常に配点として高く、重要視されていることがわかった。

IV. 技課題の考察

採点規則における難度表や減点条項等は、個々の技の特性に応じた減点条項が示されているわけではない。従って、技の課題性を把握しておかないと、理想的な実施形態との比較も困難なものとなってくる。ここでは、新体操競技における美しさに対する共通理解が本質的な前提に置かれている。

「冴え」、「優雅さ」、「雄大さ」という採点競技ならではの美的カテゴリーのうち、「冴え」は一定のポーズを鮮明に示すことが求められる。また、「優雅さ」からはアクロバティックな柔軟さは要求されないし、「雄大さ」は浮きの現象として捉えられるものである。

これらの美的カテゴリーは理想像を構成する重要な視点になるものの、その差異性を数値の量的違いで現わすことは過去の研究例を踏まえても、極めて困難である。

美的な理想像を志向した実施と、量的な評価を志向した実施はその極限において明らかな違いを示すものであり、その価値判断は決して曖昧なままにしておくわけにはいかない。採点競技ではあくまでも運動の質的側面を競い合うため、身体特質つまり体力因子としての柔軟性の欠如により雄大な実施が示されなかったとしても、それは「美しさ」に対して評価されるのであって、決して柔軟性を評価対象にしているわけではない。

従って、柔軟性を極限まで高めたとしても、それは「アクロバティック」²⁾と見なされ、美しさの評価には直結してこないのである。

VII. まとめ

採点規則の比較では、旧採点規則と新採点規則において、基礎的特徴及び減点項目では大幅な変化はないことが明らかになった。実際にバックルピボットでの観察分析を行ったところ、難度自体の価値点や審判の視点に大きな変化はなかったのだが、実施における技術的欠点及び芸術的欠点を非常に重視し、採点を行っていることが浮き彫りとなった。この実施の減点項目における採点結果は、他の難度評価の際にも共通して言える現象と考えられる。これにより、新採点規則では、演技の最終得点を出す際に極めて重要となるのは、実施の質的側面による得点であると考えられる。

本研究では、ローテーションを例として分析を行ったが、技における課題性を明ら

かにするには、選手が志向意識として「ここ」という目標像をどのように捉えているのかを分析することが極めて重要であった。2012年までの採点規則では、身体的能力(生理・解剖的)を基準として量的に細分化されてきた傾向があり、新体操の求める競技・美しさの評価との齟齬が今回の採点規則の見直しにつながったと考えられる。質を競う採点競技において量的な判断基準を安易に用いることは、競技そのものの本質を左右しかねない問題に発展しかねないため、安易な判断基準の混同は避けるべきである。そして、新体操競技が志向する美に対する問いかけはこの独自の質的な評価へと回帰する原動力となることを再度認識する必要性を感じるものである。



図1 A選手のバックルピボット

参考文献

- (1)遠山喜一郎：「新体操・上」p22(不味堂出版) 1981
- (2)金子明友：「体操競技のコーチング」、p166-171、大修館 1988
- (3)金子明友：「身体知の構造」p48(明和出版) 2007
- (4)大野久留美：新体操における動きの構造特性(愛知教育大学保健体育講座研究紀要) 2011
- (5)新体操委員会「2009年～2012年度版女子新体操採点規則」(公財)日本体操協会：P64

- (6)新体操委員会「2013年～2016年度版女子新体操採点規則」(公財)日本体操協会：P22
- (7)新体操委員会「2013年～2016年度版女子新体操採点規則」(公財)日本体操協会：P18
- (8)新体操委員会「2013年～2016年度版女子新体操採点規則」(公財)日本体操協会：P23
- (9)新体操委員会「2013年～2016年度版女子新体操採点規則」(公財)日本体操協会：P20 他